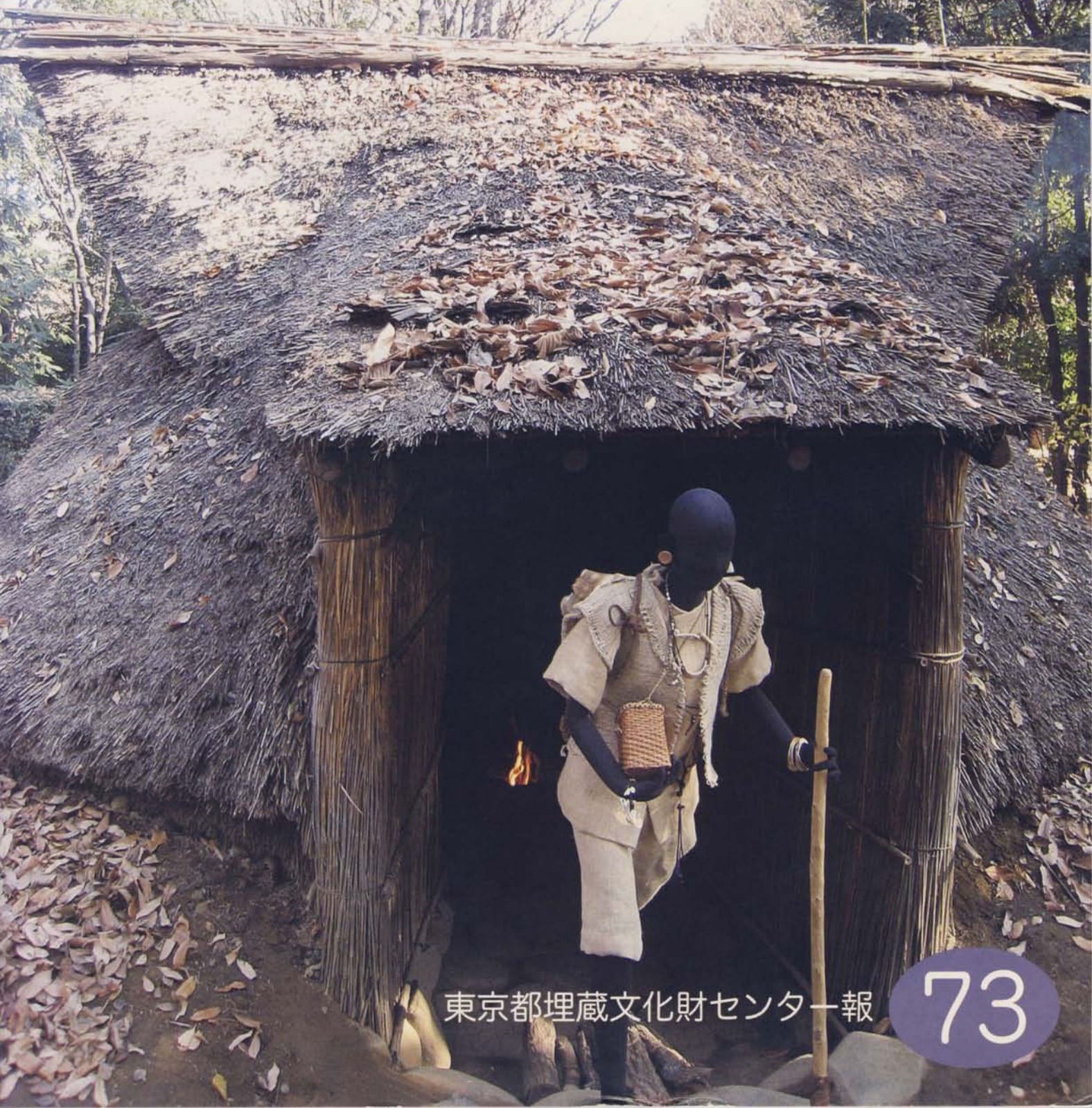


# たまのよこやま



# 復原住居を考える

## 住居の耐久年数？

遺跡庭園「縄文の村」には、入口から順にA棟・B棟・C棟という3棟の復原住居があります。いずれも縄文時代の竪穴住居を復原したもので、A棟は築1年で焼失・再建となりましたが、それでも20年という年月が経ちますと老朽化も進み、今ではすべての住居で補修が必要になってきています。

B棟では一昨年に屋根の一部でカヤの葺き替えを行い、昨年は周堤を支えるカヤ壁の修理を行いました。その時の所見では、20年経ってもすべての部材を取り換えるまでには傷んでいなかったということです。B棟は3棟の中では最も湿気のこもる住居で、雨が降るとどこからか雨水が入ってきて床面が濡れるというような住居ですが、それでも腐っていたのは直径が10cmほどの壁柱など、30本ほどある柱のうちの数本だけで、ほとんどの柱はそのまま使える状態にありました。腐っていたのは普段はカヤ壁の中に隠れている柱で、いずれも地面に接する部分だけが腐っていました。ちなみに、柱には腐りにくいクリ材が使われていましたので、このことが柱を長持ちさせた要因であろうと考えています。いったん組み上げられた屋根は垂木によって支えられていますので、柱が腐っても垂木が腐らない限り、屋根が落ちるということはないのです。

カヤ壁の工事はカヤを挟んでいた竹が腐ったことによるものでしたが、これもそこに住んでいれば状態の確認ができる場所でしたので、日頃から目が行き届いていれば今回のような大々的な工事は必要なかったのかもしれませんが、でも、住居の内部は非常に暗いので、縄文人といえども徐々に進行する小さな変化には気付かなかったかもしれません。

今年は1月下旬から、A棟の屋根の葺き替えを行いました。この住居では、屋根と壁に使われていたカヤをすべて取り除くところから始められましたが、部材の損傷はクヌギを使った垂木の数本に虫害が見られただけで、桁を支える壁柱はまったく腐っ

ていませんでした。B棟と同じクリ材が使われていましたが、B棟と違って住居の掘り込みが浅く、乾燥した環境にあったことがプラスに作用したものと考えられます。

ところで、今回の工事は屋根の葺き替えということでしたが、意外だったのは、外見の傷み具合と違って、カヤが腐っていたのは表面だけで、大部分が再利用できる状態であったということです。したがって、修理に必要な部材は、腐っていたカヤの補充分とカヤを押さえていた竹、虫害にあった数本の垂木ということになります。竪穴住居といえども部材の耐用年数は予想以上に長く、これまでのリフォームにも見られたように、数年で住めなくなるというような住居ではなかったのです。

集落研究では、住居の耐用年数ということが問題にされることがあります。多くは民族誌を参考にしていると考えられているようですが、「縄文の村」に復原されている住居を見る限り、数年で住めなくなるという状況は考えられませんが、もし数年で廃絶している住居があるとすれば、それはもともと長期間にわたる使用を想定していない住居ということになります。また、柱材についても表面を焦がしたり、樹皮を剥いだりして、キノコなどの腐朽菌が繁殖しないようにすれば、耐用年数はさらに延びることになります。

仮に柱の1本が腐っても屋根が崩落することはありまないので、隣に穴を掘って代わりの柱を建てれば簡単に補修することができます。これも大々的な工事は必要ありませんので、そこに住んでいても工事ができるということです。

住居跡の調査をしていても、床面に新旧2本の柱穴が並ぶような例は多数あります。これなども腐った柱を補修したものと考えれば、大々的な改築というような工事を想定する必要もないのです。

いずれにしても建築部材が一斉にダメになるというようなことはありませんので、その都度適切な修理が行われていれば、一時期に大量の補修材が必要になることもなく、大規模な改修工事が発生することもないのです。

住居の改築・廃絶といった問題についても、耐用年数という観点だけで考えるのではなく、別の観点で考えてみることも必要になるのではないのでしょうか。  
(可児)

# 復原住居を リフォームする



Before

遺跡庭園「縄文の村」の復原住居A棟の屋根を葺き替えました。10年ぶりの葺き替えということで、今回は会津から職人さんに来ていただいた作業となりました。途中、雪が積もった日もありましたが、予定より早く7日間で完成。リフォームの様子をご覧ください。

リフォーム期間：2008年1月21日～28日

## 使用した材料

- ・山茅（ススキ）200束、川茅（オギ）50束  
ススキは富士の裾野の御殿場で、オギは渡良瀬遊水地でそれぞれ採取。
- ・杉皮 24束
- ・真竹（グシ用）80本
- ・丸太（グシ用、ヒノキ）8本
- ・真竹（押銚竹）160本
- ・銅線 25kg
- ・棕櫚縄 10玉
- ・荒縄 12玉



1. 解体 上から順に茅を取り外す



2. 修復 傷んだ垂木を補強する



3. 軒付け 茅を下から順に葺いていく



4. 平葺き 足場を組みながら葺いていく



5. 平葺き 針を使いワラ縄で茅を固定



6. 破風軒付け



7. 整形 コテでたたいて整形



8. 刈込み 大バサミで上から下へ刈る



After

9. 完成

## 「縄文の村」四季折々

縄文の冬は忙しい。すっかり葉の落ちた落葉樹の隙間から、陽の光だけがやさしく差し込む冬の日、縄文人は一体何を思って暮らしていたのだろう。ため息ばかりの毎日に、空の青ささえも忘れてしまう現代人には、およそ想像することもできないことなのかもしれない……。それでもこの物語だけは、今回で完結させなければならない。

山の木々が落ちたこの季節、薪を集めるのに絶好の季節となる。現代社会ではまったく忘れ去られてしまった薪は、縄文人の日常生活で欠かすことのできない必須アイテムである。森の中で落ち葉を踏みしめながら、よく乾燥した枯れ枝を集める。そして、集めた大切な薪は雨露にあたらぬように、竪穴住居の中や軒先に、さらには専用の小屋を作って薪をストックしていたはずである。かつて民家の軒先に、薪の束が置かれていたように…。実はこの点は、縄文集落を考える上で意外に忘れられていた視点ではないだろうか。「薪のある風景」これも縄文集落を考えていく上での一つの景観かもしれない。

冬は茅を刈る季節でもある。竪穴住居の傷んだ屋根を補修するのに必要なススキやアシなどの茅類も、枯れたこの季節に刈り取っておく必要がある。かつて茅葺の民家では定期的に屋根を葺き替えていたので、村ごとに茅場が管理されていたが、縄文時代ではそこまでしなくとも茅は刈り放題。ただし、鉄製の鎌もなかった縄文時代ではどうやって刈っていたのでしょうか。ために黒曜石の剥片を使ってみたが意外に効率が悪く、そんなものを使わずともポキポキ折ればOK。

それにしても竪穴住居の冬は寒かったのだろう。もともと竪穴住居は北方系の住居で、寒さを防ぐことが主目的で造られ、北国の竪穴は1m以上と深く掘られている。また最近では、茅の上に土をかぶせ保温効果を挙げている「土屋根」の遺跡も全国で発掘されてきている。

冬は狩りの季節でもある。冬を乗り切るために脂肪をたくわえたイノシシやシカを狙う。油断したシカが落とし穴に落ちることもあったが、森の見通しが良くきくこの季節、弓矢による狩りが頻繁に行われたことだろう。弓矢の発明は、土器、斧と合わせて縄文時代の三大発明の一つ。ようやく手に入れた貴



雪に覆われた復元住居

重な黒曜石で作った矢じりでイノシシを狙う。その威力は絶大で、牡丹鍋が食卓を賑わせていたこともあったろう。

先日、遺跡庭園内を散策していると、草むらの中で何やらゴソゴソと物音。近づいて落ち葉を掻き分けると、小さな空間の中にクルミの実が7粒。どうやらリスかネズミの冬ごもり用の巣穴らしい。最近、庭園内に何かいるという目撃情報が寄せられていたが、今だその正体は不明。春に顔を出してお目にかかれることを楽しみにしている。

遺跡庭園「縄文の村」の四季を通して、縄文人の生活ぶりを追いかけてきました。自然の中で生きぬいていくことがどれほど大変なことか。それでも彼らは縄文の森の中で必死に生き抜いてきた。だからこそ現在の私たちの生活があるのでしょうか。コンビニで何でも手に入る時代、物が有り余る現代社会。そんなぬるま湯の中で、エコなどといっても縄文人には笑われてしまうのかもしれませんが。私たちは自然の中で貪欲なまでに生き抜いてきた縄文人の生きる力を、縄文人からのメッセージとして素直に受け止めていきたいと思います。改めて縄文人に感謝。

1月23日「縄文の村」にも雪が積もった。縄文人もムラの広場で雪だるまを作ったのでしょうか？これから訪れるであろう春。ふきのとうを待ち望みながら、このシリーズ「縄文の村」四季折々を完とさせていただきます。一年間のご愛読、ありがとうございました。(小葉)



春

夏



秋

冬





実物の約 1.5 倍

この鏡は、昨年 12 月に府中消防署の新築工事に伴う発掘調査で出土したものです。奈良・平安時代の銅鏡が完全な形で発見されることは極めてまれで、都内でも一、二例しかありません。

鏡の寸法は最大でも約 6.3 cm で、極めて小型です。厚さは平均で 2mm とごく薄い造りです。鏡の縁が花弁形を呈することから、八花鏡と呼ばれています。姿を写す鏡の表面は平ですが、裏面（鏡背）には、さまざまな文様が鋳出されています。

中央部にある丸い突起物は鈕と呼ばれ、中に孔が空けられていて、ひもなどを通して使うようになっています。鈕の周りには、上下に花をつけた枝のようなものが、左右に小鳥（鶴など）が斜め上及び下方を向いて飛んでいる姿が見られます。仮に名前をつければ、「花枝飛禽八花鏡」といったところでしょうか。その周囲には界圏と呼ばれる円形の帯があり、この帯を境にして内側を内区、外側を外区といいます。

外区には、八つの花形のそれぞれに、たなびく雲と、羽をひろげた蝶をかたどった文様が交互に配さ

れていました。また、上部斜めに隆起した線が見られますが、もともと鏡のいがた鑄型にあった傷か、鑄造時のアクシデントにより付いたものでしょう。

銅鏡の特徴からみて、中国の唐で作られた鏡を真似て国内で製作された「唐式鏡」と考えられますが、まだ、中国での出土例は確認されていません。

鏡が作られた時期は、おそらく 9 世紀中葉から後葉にかけてと推定されます。実は、これと瓜二つの鏡が、諏訪湖近くの長野県岡谷市榎垣外遺跡の平安時代住居跡から出土していることを、古代の鏡に詳しい奈良文化財研究所の杉山洋さんに教えていただきました。

杉山さんによれば、畿内地域からの出土例が無いことや鏡文様の特徴等から、地方役所に付属する工房などで鑄造された可能性が高いということです。

では、これらの姉妹鏡はどのように持ちこまれ、何のために使われたのでしょうか。現時点では、役人や何らかの職能集団が、自らの居住地における地鎮祭の祭に使用したのではないかと考えています。（松崎）

## くろがね物語 十三

### 古代の焼印

現代の焼印といえば、名だたる匠がこしらえた刃物とか、祝い事などに出される大きなお饅頭に押されたものを思い浮かべますね。はるか古代の人にとっても、モノに焼印を押すことには、何か特別な意味が込められていたのでしょうか。

遺跡で見つかる焼印は、細長い鉄棒の先端に、文字や記号をかたどった印字面を取り付けたものが多く、棒と一体で作られているものもあり、高度な製作技術が要求されます。調布市中耕地遺跡では数字の「七」、府中市武蔵国府関連遺跡では「吉」、日野市落川遺跡では「土」、町田市川島谷遺跡では「山」などの焼印が見つかりましたが、印字文面の大きさはさまざまです。古代多磨のマチやムラで出土した焼印には、印字面の幅が2.1cm～9cmのものまであり、押される対象物によって異なる大



落川遺跡から出土した「土」の焼印



No. 107 遺跡から出土した焼印がある木皿の例

きさの焼印が使用されたと思われます。

では、焼印の用途はいかなるものだったのか。それを物語る資料が、多摩ニュータウンNo. 107 遺跡の水場から出土した木皿にありました。皿の内面中央に、「官」や「全」の文字が2.5×3.5cmに焼き付けてありました。

これらは、役所などで使用された食器類ではないかと推定されています。器物の所有や管理、あるいは生産者を表すために押されたものといえるでしょう。おそらく、一般の村においても家族や集団の所有物を識別するしとして、使われていたと推測できます。実は焼印には、もう一つの重要な役割がありました。

それはまた、次回に・・・。

(松崎)

### 保存科学室 だより

今回は、左頁で紹介されている武蔵国府関連遺跡の鏡の錆落としてまつわる話です。

この鏡が保存科学室に持ち込まれたのは、昨年暮れも押し詰まった頃。鏡は全体が土を巻き込んだ硬い暗緑色の錆（緑青）で覆われ、内部の様子がまったく分からない状態でした。ところが、軟X線透視装置で観察したところ、文様まできちんと残っていることが分かったのです（写真左）。そこで問題になったのが、どのようにすれば、鏡自身を傷つけることなく、全面を覆っている硬い錆を落とすことができるかという点でした。保存科学全般に言えることですが、完璧な手法というものはありません。遺物の状態などによって対処方法は千差万別、現状で何が最適な手



左；X線写真解析画像

右；錆に覆われた鏡

当てなのか思案しながらの作業となります。特に今回のような特別な遺物の場合、失敗が許されるはずもなく、調査担当者の目も厳しく光る中、処置をする側も気が休まりません。

ひとまず、実体顕微鏡下でメスを用いて慎重に土や錆を取り除いていきましたが、鏡面直上の錆が手強く、傷をつけずに取り除くのが大変困難でした（写真右）。そこで、テキサスA&M大学ハミルトン先生の手法を参考にテストを行っていた電解還元法を試みることにしました。これは、アルカリ溶液中で遺物に電気を流してクリーニングを行う方法です。

2時間ほどの処理の結果、表面を覆っていた錆の大部分を安全に落とすことができました。再び顕微鏡下での補足作業を行った結果が左頁の写真です。

その後、新たな錆の進行を抑える脱塩という工程を経て、現在は、高級アルコール樹脂を含浸する工程に入っています。この号が刊行される頃には、皆さんの前で展示できるようになっているでしょう。

(長佐古)

## 2008年度 企画展示のお知らせ

「縄文人に会いに行こう」をテーマに1年間の企画展を開催しています。

縄文時代の人々は一体どのような暮らしを送っていたのでしょうか。多摩で発見された多くの縄文土器や、縄文人が使っていた狩猟や木の加工に使っていた石の道具、さらには縄文人が身につけていた装飾品などから、縄文人の生活ぶりを探ってみてください。衣服や装飾品を身につけた縄文人も再現してみました。現代人と比較しながら見学してみてください。また、今回は特別に東村山市の下宅部遺跡から出土した弓などの貴重な遺物や、4000年前の縄文人骨も合わせて展示しています。是非、一度縄文人に会いに来て下さい。

展示コーナー以外では、火起こしなど縄文人の暮らしを体験できるコーナーも用意しています。実際に触れて、見て、当時の生活を体感してみてください。

また、企画展に合わせたビデオなどもそろえておりますので、学校の授業やセンターの見学の際には是非、ご鑑賞ください。

下の表は4月から1年間分の行事等のご案内です。事前の申込みが必要なものもありますので、ご確認のうえ奮ってご参加ください。



### 2008年度 広報・普及事業のご案内

(一般は中学生以上)

行事名	対象/人数	日	時	備考
文化財講演会	一般120名	第1回 6/21(土) 第2回 7/16(水) 第3回 9/20(土) 第4回 1/21(水) 第5回 2/21(土)	13:30~15:30	当日受付 無料
文化財講座	一般120名	第1回 11/4(火) 第2回 11/5(水) 第3回 12/9(火) 第4回 12/10(水)	13:30~15:30	当日受付 無料
発掘調査発表会	一般120名	3/20(祝)	13:00~16:00	当日受付 無料
展示説明会	参加自由	4/19(土)	午前の部10:00~ 午後の部13:30~	当日受付 無料 1時間程度
縄文土器作り教室	①④一般30名 ②③親子15組	制作 ① 5/3・4(祝) ② 7/23(水) ③ 7/24(木) ④10/4・5(土・日) 野焼き ① 6/7(土) ②③共 8/18(月) ④ 11/8(土)	制作 9:30~16:00 野焼き 9:30~15:30	往復はがきで申込み ①締切:4/18(金) ②③締切:7/11(金) ④締切:9/19(金) 参加費 300円
縄文アクセサリー作り教室	①⑥⑦ 一般30名 ②~⑤⑧⑨ 親子15組	① 5/31(土)午前 ② 7/30(水)午前 ③ 7/30(水)午後 ④ 8/23(土)午前 ⑤ 8/23(土)午後 ⑥10/18(土)午前 ⑦ 1/24(土)午前 ⑧ 3/27(金)午前 ⑨ 3/27(金)午前	午前 9:30~12:00 午後 13:30~15:30	往復はがきで申込み ①締切:5/16(金) ②③締切:7/18(金) ④⑤締切:8/8(金) ⑥締切:10/3(金) ⑦締切:1/9(金) ⑧⑨締切:3/13(金) 参加費 300円
古代の布作り教室	①④一般30名 ②③親子15組	①6/28(土)午前 ②8/6(水)午前 ③8/6(水)午後 ④12/6(土)午前	午前 9:30~12:00 午後 13:30~15:30	往復はがきで申込み ①締切:6/13(金) ②③締切:7/18(金) ④締切:11/21(金) 参加費 300円
貝輪作り教室	一般30名	① 9/27(土)午前 ② 9/27(土)午後	① 9:30~11:30 ② 13:30~15:30	往復はがきで申込み ①②締切:9/12(金) 参加費 300円
考古学実習① —古代食体験—	一般20名	5/10(土)	10:00~16:00	往復はがきで申込み 締切:4/25(金) 参加費 300円
考古学実習② —火起こし体験—	親子15組	① 8/2(土)午前の部 ② 8/2(土)午後の部	午前の部 9:30~11:30 午後の部 13:30~15:30	往復はがきで申込み 締切:7/18(金) 参加費 300円
考古学実習③ —縄文食体験—	一般10名 親子10組	11/1(土)	10:00~13:00	往復はがきで申込み 締切:10/17(金) 参加費 300円
考古学相談室	小・中学生・一般	通年(土日は除く)	10:00~16:00	受付随時 無料



たまのよこやま 73

2008年 3月 21日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>